

## 成立期の近代國家(上)

中山 治 一

### 序

#### 一 「政治史」的觀點

周知のやうに、ヤコブ・ブルクハルトはその著“*Weltgeschichtliche Betrachtungen*”に於いて世界史の展開を「國家」・「宗教」・「文化」と云ふ三つの力(*drei Potenzen*)の相關として觀照してゐるのであるが、その冒頭に次の如く云つてゐる。

「此等(の三つの力)は、往々、その働きに於いてすら、互に交替するやうに思はれる。即ち、特に政治的な時期及び特に宗教的な時期、或は少くともそのやうな時機があり、また最後に特に大なる文化目的のために生きるやうに見える時期がある」<sup>①</sup>。

ところで、現代が「特に政治的な時期」(*Vorzugsweise politische Zeiten*)の一つであることは、我々の日々の生活に於いて切實に體驗せられるところである。嘗つて、「特に宗教的な」と考へられる時代があつた。その時、宗教的權威が教會の支配を通してあらゆる世俗の權力の上に君臨してゐたばかりで

はない。更に、勞働や開墾や租税の徴收や現金輸送や——要するに實際生活のあらゆる營みが宗教目的と矛盾しないばかりでなく、むしろ宗教目的の實行に伴はれつゝ、或は宗教的熱情を伴ひつゝ遂行されたのである。こゝに於いては、すべての「政治的・社會的諸關係が宗教的な生目的によつて支配せられ且つ僧侶の強力によつて直接・間接に指導される一つの「ハルモニー」<sup>②</sup>をなしてゐたのであつて、云はゞあらゆる行爲の實踐が宗教的な意味を有ち、宗教的な Potenz に滲透されてゐたのであつた。同様に、現代に於いては、政治的な力がすべてを決定するやうに見える。<sup>③</sup>國家の權力は、今日、法的支配即ち統治を行ふ力としての性格を稀薄にして、政治的支配をなす實力 (Macht) としての性格を生々しく露呈してゐる。それは、今日に於いては、單に法的に支配する統治力として我々の前に在ると云ふよりも、むしろ神祕的にさへ感じられる „charismatisch“ な強力 (Gewalt) として我々の上におほひかぶさつてゐるのである。而も、それが經濟をも宗教をも思想をも日常の慣習をも家庭生活をも——要するに人間生活のあらゆる領域にわたつて、統制し・指導し・創造し・強制する絶對的な力として作用するばかりではない。如何なる社會現象も、如何なる文化活動も、如何なる思想も、今日にあつては、すべて政治的な性格を帶び・政治的に作用し・政治的な意味を有たざるを得ないところに、「特に政治的な」と考へられる現代の時代的性格がかゝはれるのである。

勿論、歴史敘述もまた、かやうな時代的運命から自由であることは出來ない。それが如何なる時代

を・また如何なる時代の如何なる事象を敘述の對象としてゐるにしても、今日書かれるすべての歴史敘述は、それ自身に於いてすでに政治的な意味を有たざるを得ないのである。或は、歴史を敘述すると云ふ行爲それ自體がすでに、現代に於いては、政治的な意味を有つてゐると云ふべきであるかもしれない。現代の歴史家の或る人々はすでにこのことを自覺してゐる。例へば、アメリカのチャールズ・ピアード教授が一九三三年末になした講演「信念の行爲としての書かれたる歴史」<sup>④</sup>の如きは、これを示すものであらう。

かやうな現實の事態に對應して、「政治史的傾向の擡頭」即ち「政治史を強調する風潮」が「近年史界の注目すべき一傾向として見られ」<sup>⑤</sup>てゐる。然しながら、「歴史の考察に於て政治史的要素を重んずること」<sup>⑥</sup>と、歴史を書く行爲それ自身が今日に於いては政治的な意味を有つと云ふことは、當然區別されるべき事柄である。勿論、それが共に現代の Situation に於いて生れた現象である以上、兩者が無關係であることが出来ないのは云ふまでもない。それにも拘らず、前者が云はゞ純粹に史學思想の問題として歴史敘述の理論及び歴史の上から考へられるべき半面をもつのに對して、後者は「特に政治的な」と考へられる現代の時代的性格のあらはれとして現代社會のあらゆる現象が共にそれから免れることの出来ない時代的運命を示してゐるものに他ならないのである。後者は云はゞ單に史學思想の問題であるよりも、むしろそれ以前の或はそれを越えた時代全體の問題でなければならぬ。さきに擧

げたピアード教授が、現代に於いては「歴史を書く」行爲自體がすでに政治的な意味を有つことを自覺するとともに、結論として、歴史家はむしろ積極的に先づ現代社會の現實の動向に對する自己の態度を決定し然る後にその政治的立場より「信念の行爲としての」歴史を書くべきことを主張して、これによつて「惡しき歴史主義」を克服し得ると考へてゐるのは、かやうな二つの問題を混同する——或は區別することを知らない——ところから發する根本的な誤謬を犯してゐるやうに考へられる。最近の史學思想に就いて謂はれる「政治史的傾向」とは、決してピアード教授の説く如く歴史敘述をば單純に直接的に現實社會の動向に結びつけやうとする主張ではない。また少くともそれが純粹に歴史學の問題である限りは、現代史學の「政治史的傾向」はそのやうな側面から取上げられるべき問題ではないであらう。ピアード教授は「歴史家」が「政治家の地位に在る」<sup>⑧</sup>ことを説いてゐるのであるが、これはもはや歴史學の外に在る問題であらうと思はれる。少くとも、歴史主義の克服はかやうな方向を進むことによつて果されるべきではなく、新しい歴史意識の誕生はかやうなところに求められることは出來ないのである。史學の外に在る問題を史學の問題として持込むピアード教授の如きは混亂する史學思想を尙一層の混亂に導くものと云へないであらうか。

然るに、最近の史學の傾向として謂はれてゐる「政治史を強調する風潮」は、純粹に史學思想の問題として歴史敘述の理論とその歴史の上から展開されるべき問題である。勿論、このことは、それが現代

社會の現實の動向とは全く無關係であることを意味してゐるのでないことは斷るまでもない。それにも拘らず、同時に、それが現實の事態の單なる反映として唯これからのみ説明さるべきでないこともまた自明でなければならぬ。むしろ此の「風潮」が、歴史主義が危機に在ると云はれた時期に次いで現れた「風潮」であるところに、その眞の意味が汲みとられねばならないと考へられるのである。云ひかへると、此の「傾向」が十八世紀末以後十九世紀を通じて支配的であつた“Historisierung”の思惟方法の破綻のあとをうけて歴史思想の危機を克服すべく現れた新しい歴史考察の立場であるところに、此の問題の眞の意義が見出されねばならないと考へられるのである。

かやうにして、歴史考察に於いて政治的契機を強調する最近の「傾向」は、それが特に所謂「歴史主義の危機」との關係に於いて考へられることによつて始めて眞に理解されることが出來ると云つて差支ないであらう。換言すれば、もしもそれが例へば前世紀の四十年代・五十年代に於ける「小ドイツ派」の政治的歴史敘述や或はカール・ラムプブレヒトをめぐる「文化史論争」時代に於ける政治史強調の史風の單なる再生乃至はそれらの類似現象の如きものとして理解されるならば、此の「傾向」の提出する問題の重要性とその眞の意味はもはや全く見落されたものと云はれねばならないであらう。繰返し云ふならば、最近の史學の「政治史的傾向」は、十九世紀及びそれ以前のあれこれの政治史的立場の單なる再現の如きものとして理解さるべきではなくて、むしろそれが「歴史主義」的歴史考察一般との對比

に於いて把握されるときに始めてその眞の意味するところが理解されうると考へられるのである。勿論、こゝに云ふ「歴史主義」(“Historismus”)なる言葉は、すでに早くオトー・ヒンツェが注意してゐるやうに、“nicht ganz eindeutiges Schlagwort”であつて、様々の意味を擔はされてゐることは周知である。しかし、此の言葉そのもの歴史やそれが用ひられた夫々の場合の意味内容を擧示するところは、此の場合、カール・ホイシイの詳細な研究に委ねておきたい。唯、此の言葉の意味するところが“grundsätzliche Historisierung unseres Wissens und Denkens”にあり、そして思惟のHistorisierungが十八世紀以前の“Naturalisierung oder besser Mathematisierung des Denkens”に對蹠的なものであることは、エルンスト・トレールチュと共に吾々の認めねばならないところであらう。「歴史主義の成立」を考察したフリードリヒ・マイネッケもまた、「歴史主義」と云ふ言葉によつてかやうな内容を意味せしめてゐるやうである。

従つて、「歴史主義」なる言葉が十八世紀以後十九世紀に見られる史學思想上のあれこれの立場を指すものでないことは勿論である。それは、カール・マンハイムの云ふ如く、「その哲學的樞軸が Entwicklungsgedanke にあるところの世界觀」そのものである。それは、マイネッケもまた注意してゐるやうに、「單なる精神科學の方法以上のものを意味する」のであつて、云はゞ“Lebensprinzipien überhaupt”に他ならないのである。それ故に、「歴史主義の危機」の問題は、それ自身非常に大きい根本

的な問題をなすものと謂はるべく、云はゞヨーロッパ精神史の上に劃時代的な意義を擔ふものとして考へられねばならないであらう。例へば、それは、「ルネサンスの終末・ヒューマニズムの危機」<sup>16</sup>或は「Europäismusの動搖」或は「西歐の没落」と云ふ如き形に於いて——或は少くともかやうな問題との關聯に於いて——論せられることが可能であるし、また論せられねばならないであらう。マイネッケの説く如く、「歴史主義の出現が西歐の思想の嘗て經驗せる最大の精神革命の一つであつた」<sup>17</sup>とするならば、その危機もまた、當然一つの新しい「精神革命」の前奏曲でなければならぬであらう。

然しながら、吾々の課題は、今かやうな問題をそのまゝに取扱はうとするところにあるのではない。吾々の向ふべき對象は、むしろわづかにかやうな問題の一側面にすぎない。即ち、「歴史主義」と云ふ“Lebensprinzipien”を根柢としてその上に築かれた十九世紀の歴史考察の立場が本來如何なる性格のものであり、そして最近の史學の「政治史的傾向」はかやうな立場と如何なる意味に於いて對比させられるべきかと云ふ點にのみ、吾々の關心がかけられるにすぎないのである。それ故に、こゝでは、「歴史主義」的歴史考察の立場が本來如何なる特質によつて性格づけられてゐるか、先づ問はれねばならないであらう。

「歴史主義」が吾々の思惟の“grundsätzliche Historisierung”を意味することは、さきに吾々がトールチュと共に認めたところであるが、「此の立場に立つて吾々はあらゆるものを生成の流れに於いて

見る、無限のそして常に新たなる個別化に於いて、過去による規定に於いて、未だ知られざる未來のものへの進向に於いて、あらゆるものを見るのである。國家も、法も、道德も、宗教も、藝術も、史的生成の流れの中に溺れ込み、そしてそれらは唯史的發展の成分としてのみ、吾々に理解される」<sup>⑮</sup>こゝとなる。あらゆるものが生成の流れに於いて捉へられるとき、吾々の現在もまた、無限の生成の流れの中の一點の如く考へられざるを得ない。吾々がそこに於いて行爲するところの現在は、無限の延長を有つ過去と同じく無限の延長を有つ未來との接觸する一點に過ぎないと考へられるのである。かやうに、現在が *Zeit-Raum* としてではなく、過去から未來に走る無限の連續直線の上の一點 *Zeitpunkt* として考へられるとき、吾々の行爲の場所もまた吾々自身すらも、見失はれざるを得ないであらう。ニイチエと共に「極端な例、即ちいたるところに於いて生成を見ることを宣告された一人の人間」を考へるならば、「かやうな人間はもはや自分自身の存在を信じない、もはや自分自身を信じない、すべてのものが動ける點となつて散り散りに流れゆくのを見る、そして此の生成の流れのうちに自分自身を失ふのである。かやうな人間は、まがふかたなきヘラクリトの弟子として、終にはもはや指を擧げることをも敢てしないであらう。」<sup>⑯</sup>

人間が「指を擧げることをも敢てしない」とき、即ち非時間的<sup>⑰</sup>現在のな行爲の世界が見失はれるとき、「生ける」現在は「死せる」過去によつて支配されるばかりである。こゝに於いては、創造し・建設



するものは、現在の人間ではなくて、むしろ過去の世界・歴史の中に求められる。かやうにして、「死せる」過去が過剰に蘇らされねばならず、そして十九世紀が特に「歴史の世紀」であることが出来たのであつた。此の世紀の歴史敘述の中で特に“aktiv”なものとして特徴づけられてゐる「小ドイツ派」の「傾向的」な政治史すら、ベネDET・クロチエの教へる如く、實は「過去によつて身を支へ、そして過去の中に・傳統の中に或は傳統のディアレクティクの中にその傾向の正當さの辯明を探し求める」ものにすぎず、結局はロマンティクの歴史敘述の一亞種即ち「復古の歴史敘述」に他ならなかつたのである。かやうに歴史が過剰に蘇らされることを一つの病的状態——“historische Krankheit”——として指摘した最初の人は、ニイチエであつたと考へられる。彼の「生に對する歴史の利弊」は、此の疾患に對して「非歴史的なもの」及び「超歴史的なもの」を解毒劑として處方しやうと企圖したものに他ならぬ<sup>24</sup>。彼の「考察」は二重の意味に於いて「季節はづれ」なものとなはれるべきであらう。第一に、自らを「歴史の世紀」と誇稱した世紀に於いて歴史學及び歴史的教養を「疑はしきもの」或は「危険なもの」と考へたことによつて、また第二に、「學問のための學問」が自明の價値であつた時代に於いて歴史學を學問以外の規範によつて律しやうと考へたことによつて。此の「季節はづれの考察」に於いて主張されてゐる「歴史は生に仕へねばならぬ」と云ふ教説は、ハンス・フライヤーの注意してゐる如く、明かに當時の geistige Situation から考へられたものであり、疑ひもなく Gegenrechnung を加へられるべきもの

であつて、そこに於いては「歴史認識の自主性と歴史の・學問としての性格が軽々に放棄されてゐる」のである。云はゞ、ニーチェは「蔽ひ茂れる Historismus に對する闘争の武器」<sup>27)</sup>を提供するために、歴史の科學性を犠牲に供したのであつた。

然し、それにも拘らず、彼の鋭い洞察の中に時代的制約を越えた眞理が含まれてゐることを吾々は見落してはならない。彼の教へる眞意は、要するに「歴史主義」的歴史考察に於いて見失はれてゐる歴史認識の主體的契機をその正當な位置に置かうとするところにあつたと考へられる。彼は教へる、歴史は單に「後に來つた者」の意識に於ける過去の反映であるのではなくて、むしろ現代の精神の „synthetische Leistung” である<sup>28)</sup>と。「蔽ひ茂れる歴史主義」の克服は、ニーチェの教へてゐるやうに、ただ歴史認識の主體性を正當に自覺することによつてのみ果されることが出来る。今世紀に入つて、クロチエが「あらゆる眞の歴史は現代の歴史である」<sup>29)</sup>と云つたとき、またトレールチュが歴史哲學の二つの主契機の一として “gegenwärtige Kultursynthese” を考へたとき<sup>30)</sup>、彼等は共にニーチェの教説の眞の繼承者であつたのである。「歴史の世紀」に於いて「季節はづれ」であつた「考察」は、二十世紀の今日に於いて始めて生命を得たと云はれるべきであらう。「それ故に」、トレールチュは云つてゐる、「現代歴史主義の危機と自覺とは主としてニーチェから發してゐるのである」<sup>31)</sup>と。

かやうに、歴史が現在から・主體的立場に於いて把握されるとき、歴史敘述の對象としての過去の

存在もまた異つた風に捉へられる。嘗つて「歴史主義」の立場に於いて現在が過去から未來に向ふ無限の直線の上の一點 *Zeitpunkt* と考へられたとき、過去の夫々の時點もまた一の *Zeitpunkt* として考へられ、過去の存在は單に「成りしもの」“*das geschichtliche Gewordensein*”として云はゞ「つくられた形骸」に於いて捉へられた。然るに、現在が行爲の場所 *Zeit-Raum* として考へられ、そしてこゝから歴史が主體的に捉へられるとき、過去の夫々の時點もまた *Zeit-Raum*・行爲の場所として考へられ、歴史的存在もまたその存在の基底たる非時間的・現在の實踐の世界に於いて把握されることが出来る。かやうにして、歴史認識に於ける主體的契機が自覺せられ、歴史が現在から・即ちニイチェの云ふ「生」の立場から書かれるならば、その對象となる過去の存在もまたやがて「既につくられたる」存在としてではなく「現に創造しつゝある」實踐の姿に於いて把へられるであらう。歴史考察に於ける「現在の綜合」とは、單に歴史認識の一の契機にのみかゝはる問題ではなく、むしろ必然的に歴史的存在そのものにも及ぶべき問題でなければならぬ。それは、歴史が主體的な立場に於いて現在から書かれるべきことのみを云つてゐるのではなくて、むしろ歴史的存在が如何なる側面に於いて把へられるべきかを教へるものであらう。従つて、かやうな立場にあつては、歴史は單に「つくられた形骸」を對象として觀照せられるべきものではなくて、むしろ創造し・建設しつゝある行爲の主體の「働き」を對象として實踐の世界として再現されるべきものとなる。それ故に、こゝに於いては、例へばつくられた

作品よりもつくる制作の行爲が、また制度よりも政治が、そして支配される客體よりも支配する力が、歴史敘述の對象として取上げられることもまた必然でなければならぬ。

勿論、現在の立場から主體的に捉へられる歴史がたゞ政治史に於いてのみ表現されることが出来る  
と云ふのではない。斷るまでもなく、つくる人間の行爲・創造する力と、「つくられたもの」との二つ  
があることは、歴史のあらゆる領域に於いて一般である。しかし、それにも拘らず、文化史或は社會  
經濟史が「つくられたもの」を對象としてこれを客體的に捉へるところにその特質を有つのに對して、  
政治史は行爲或は力を對象としてこれを主體的に把握するところにその本來の使命があると考へられ  
るのである。例へば、最もすぐれた社會史家の一人と考へられるフュステル・ドゥ・クーランヂュが國家  
の歴史をその歴史敘述の中心に据ゑながら、しかも國家の組織を「die treibende Kraft」とは考へず單  
に社會狀態の「Ausfluss」として下から(von unten aus)考察した如き、また彼の流れをくむ經濟史家  
アンリ・セエが政治ではなくして特に政治制度・經濟制度・社會制度(les institutions politiques, econo-  
miques, sociales)を取上げた如きは、社會經濟史がその對象を本來如何なる態様に於いて捉へやうとす  
るものであるかを示すものとして、此の場合吾々にとつて示唆的であらう。更にまた、最もすぐれた  
文化史家と云はれるブルクハルトにとつては本來歴史を書くことそれ自體が現實からの逃避であつた  
と考へられてゐるのであるが、彼が政治的なものを取扱ふ Grundmotiv は、彼自らの書いてゐるやう

に、「國家の偉大さの眞の諸條件をひそかに跡づける」<sup>③⑥</sup>ことに他ならなかつた。これに反して、政治家フォン・トライチュケに於いては、國家は先づ「力」(Macht)として捉へられてゐるのである。<sup>③⑦</sup>かやうにして、歴史的存在を非時間的・現在のな行爲の世界に於いて・現在から・主體的に把握しやうとする歴史考察が何よりも先づ政治史の領域に於いて最もよき表現を見出すものであることを吾々は了解し得るであらう。

## 二 「政治的な」時期

最近の史學思想に就いて謂はれてゐる「政治史を強調する風潮」の意味するところは、以上の如くして理解されることが出來たと考へられる。

今吾々は、「政治史」なるものゝ本質を右の如く理解しながら、現代とひとしく「特に政治的な時期」であつたと考へられる近代國家の成立期の一二の問題を考察しやうとするのであるが、それに先立つて「特に政治的な時期」とは如何なる時代であるか、そしてそれが何故「特に政治的な」容貌を呈するのであるかを少しく考へておきたいのである。

吾々は、「特に政治的な時期」とはこゝでは先づ「國家の法的支配とその政治的支配とが一致しない時期」であると解したのである。元來、「國家の政治的支配は、一般には國家の法的支配——統治——と重疊して行はれる」ものであつて、「兩者は決して全くその範圍を異にするものではなく、概ね同

一範圍内で互に渾然と融合して居るのである。故に、國家の統治の根本形式は原則として同時に國家の政治的支配の根本形式を意味する。即ち、專制君主制は專制君主政であり、共和制は共和政であり、立憲君主制は立憲君主政なのである。けれども、國家の變遷の過渡期に際しては、國家の法的支配とその政治的支配との間に時として明瞭な喰ひ違ひの生ずることがある。法は國家の靜態原理であり、硬化守舊の本性を有するのに反し、政治は本來生命であり、活動であり、飛躍であるために、政治的變遷の急激に行はれる場合には、法は自ら政治の動きに取り残され、國家統治の形式は依然として舊態を存しつつ、その法的統治形式を通じて行はれる政治的支配は、全く新たな實質を具ふるに到ることがあり得る<sup>85)</sup>のである。かやうな時期を、吾々は「特に政治的な時期」と云ひたいのである。それは、國家の變遷の過渡期に他ならないのであるが、云はゞ政治が制度を突き破る時期なのである。國家の靜態原理が飛躍の力——政治——によつて破られる時期なのである。例へば、アウグスツスの共和制、君主政の時代の如き、或は今吾々が取扱はうとする近代國家の成立期の如き、何れもかやうな時期として特徴づけられることが出来るのである。

然るに、一般に、近代國家は絶對主義(Absolutismus)の國家(die absolute Monarchie)の形態に於いて成立するものであり、そしてその成立する前には封建國家(Lehensstaat)の末期の形態としての身分制(等族制)國家(die ständische Monarchie)が存在するものであるから、吾々の取扱はうとする時代

は der absolute Monarch の權力が die ständische Verfassung を打破しやうとして事實打破した時期に他ならないのである。それ故にまた、吾々の考察の直接の對象として、die ständische Verfassung と絶對王政とが取上げられねばならないのである。(未完)

- ① J. Burchardt: Weltgeschichtliche Betrachtungen, Kröners Taschenausgabe, S. 30.
- ② E. Troeltsch: Die Bedeutung des Protestantismus für die Entstehung der modernen Welt, 5te Aufl. 1928. S. II.
- ③ ヘルマン・ト・シムランガー著(小塚新一郎譯)「文化哲學の諸問題」第五章經濟——政治的關係の變遷、參照。
- ④ Ch. A. Beard: Witten History as an Act of Faith. (Presidential Address delivered before the American Historical Association at Urbana, December 28, 1933). Am. Hist. Rev. XXXIX. No. 2. Jan. 1934.
- ⑤ ⑥ 大類伸博士「政治史と文化史」(東北帝大法文學部十周年記念「史學文學論集」)三頁。
- ⑦ Ch. A. Beard, op. cit. 此處にコトを教授は「資本家的專制・プロレタリア專制・集團的民主制の三つの動向を擧げてゐる。
- ⑧ Ch. A. Beard, op. cit. p. 226.
- ⑨ O. Hintze: Troeltsch und die Probleme des Historismus. Hist. Zeitschr. Bd. 135. Heft 2. 1927. S. 190.
- ⑩ K. Heussi: Die Krisis des Historismus. Tübingen 1932. S. 1-21.
- ⑪ E. Troeltsch: Der Historismus und seine Probleme, Gesam. Schr. Bd. III. Tübingen 1922. S. 9.
- ⑫ F. Meinecke: Die Entstehung des Historismus, München u. Berlin 1936. Bd. I. S. 2-3.
- ⑬ K. Mannheim: Historismus. Arch. f. Sozialwissenschaft u. Sozialpolitik, Bd. 52. 1924. S. 3. Vgl. K. Heussi, a. a. O. S. 15.
- ⑭ F. Meinecke, a. a. O. S. 2. bzw. S. 8.
- ⑮ cf. N. Berdyaw: The End of Our Time. London 1933.

Ditto, The Meaning of History. London 1936.

- ② 歴史雜誌の「Europäismus」に關するに於て Vgl. E. Troeltsch: Der Historismus u. s. Probleme, S. 703 ff.
- ③ F. Meinecke, a. a. O. S. 1.
- ④ E. Troeltsch, Die Neue Rundschau XXXIII. 1922. S. 573. bei K. Heussi, a. a. O. S. 13.
- ⑤ F. Nietzsche: Vom Nutzen u. Nachteil der Historie für das Leben, Der Unzeitgemässen Betrachtungen zweites Stück. Krü-  
ners Taschenausgabe, S. 3.
- ⑥ G. v. Below: Die deutsche Geschichtsschreibung von den Befreiungskriegen bis zu unsern Tagen. 2te Aufl. 1924. S. 44.
- ⑦ B. Croce: Zur Theorie und Geschichte der Historiographie, Tübingen 1915. S. 223.
- ⑧ B. Croce, a. a. O. S. 220.
- ⑨ Vgl. G. v. Below, a. a. O. S. 88.
- ⑩ F. Nietzsche, a. a. O. S. 90.
- ⑪ F. Nietzsche, a. a. O. S. 91.
- ⑫ H. Freyer: Systeme der weltgeschichtlichen Betrachtung. Propyläen-Weltgeschichte, Bd. I. S. 3.
- ⑬ H. Freyer, a. a. O. S. 4-5.
- ⑭ H. Freyer, a. a. O. S. 4.
- ⑮ H. Freyer, a. a. O. S. 5.
- ⑯ B. Croce, a. a. O. S. 2-3.
- ⑰ E. Troeltsch: Historismus u. s. Probleme. S. 694.
- ⑱ E. Troeltsch: Historismus u. s. Probleme. S. 140.
- ⑲ K. Heussi, a. a. O. S. 13.
- ⑳ E. Fueter: Geschichte der neueren Historiographie. 3te Aufl. 1936. S. 561.



- ③⑧ H. See: Science et philosophie de l'histoire, 2e édition, 1933, p. 142.
- ③⑨ K. Löwith: Jacob Burckhardt, der Mensch inmitten der Geschichte. Luzern 1936. S. 155.
- ④⑥ K. Löwith, a. a. O. S. 154.
- ④⑦ H. v. Treitschke: Politik, Bd. I. 3te Aufl. 1913. S. 32.
- ④⑧ 尾高朝雄教授「國家構造論」四四一—四四二頁。